

ジャガ芋

池田 真也

◇1喫茶店

高そうな洋服で着飾っている真弓とさえない格好の茂昭

真弓「…だから、このままずるずる会っていてもお互いのためにならないと思うの」

茂昭「…く、くだらねえ。飽きたら飽きたって言えばいいじゃねえか」

真弓「違う。…だからこれから大切な時期だし…」

茂昭「俺のよりも偏差値の高いチンチンのほうが気持ちいいってか」

真弓「…ひどい」

立ち上がる茂、歩きだす。

真弓「(泣きながら)昔はもっと明るかったじゃない。もっと優しくかった…そんなこと言う人じゃなかった」

茂昭「そんなことを言うやつになったんだ」

◇2予備校

模試の結果を見ている茂昭。C(志望校の合格の可能性の0%)とD(25%以下)が並んでいる。夏から上がっていない。

丸めてくしゃくしゃにする茂昭。

◇3 予備校の屋上。夕方。

茂昭 「ピストルがほしいなあ」

上杉 「ピストルでなにすんだよ」

茂昭 「銀行強盗……どっかにピストルないかなあ」

指をピストルの形にしてそれを空に向ける。

茂昭 「バキューン！」

◇4 茂昭のアパート

疲れた足をひきずって帰って来た自分の部屋。ひどく散らかっている。その場にへたりこむ。電話がなる。

茂昭 「もしもし……母さん。……元気だよ。……まずまずかな。来年は大丈夫だよ。……え？野菜？あーあー。食べた食べた。……うまかったよ。……カレーライス……じゃあ忙しいから……またね」

電話を切る。冷蔵庫を明ける。送られてきた野菜はすでに腐っていた。

茂昭、芽の出ているジャガ芋を手取る。

アパートの窓を開け、それを思いっきり投げた。

終わり